

<講演記録>

第 32 回 京都工芸サロン

京都市産技研と伝統産業の関わりについて

(2019 年 2 月 28 日開催)

地方独立行政法人 京都市産業技術研究所
知恵産業融合センター長

安藤 信幸

司会 今日は多くの皆さまにお集まりいただきましてありがとうございます。また、安藤さんにはこうして来ていただきまして、ありがとうございます。

今日は産業技術研究所からは何人かお見えですので、まず、京都工芸サロンについて簡単に説明します。京都産業学センターというのは平成 14 年ですから、いまから 17 年前にできました。できたころから伝統産業の関係の方をお招きして、年に 2 回、京都工芸サロンというのをずっとやってきていました。

今年度も 11 月に佐藤喜代松商店の佐藤社長に講演をお願いしました。実際の職人さんや経営者の方だけではなくて、伝統産業に関わりがあるということで、以前はふれあい館の館長だった八田さんをお願いしたこともありますし、今回は知恵産業融合センター長の安藤さんをお願いしました。特に産業技術研究所が伝統産業と非常に関わりが深いということで、この辺りについてぜひ我々も学ぼうということで企画したところです。安藤さんの略歴を簡単にご紹介しますと、1960 年に大阪市でお生まれになって、1985 年に近畿大学の大学院工学研究科応用化学専攻の博士前期課程を修了されて、いったん民間企業で働かれて、1992 年に産業技術研究所の前身の一つである工業試験場に入られて、2016 年から知恵産業融合センター長をされているということです。

そうしましたら、お願いします。

講演内容

ただいまご紹介にあずかりました、安藤と言います。よろしくお願いします。今日はすごい先生方の前でお話しさせていただくということで、久しぶりに非常に緊張しています。よろしくお願いします。内容はさあ、どうだろうと思いますが、発表のことに關しまして、その後に交流させていただくのも非常に楽しみにしていますので、よろしくお願いします。

まず、京都市産業技術研究所、通称、産技研と我々は言っています。伝統産業との関わりについて、本来業務を中心にお話しさせていただきます。もともと私も漆をやっておりました。研究の内容についてはしゃべられないところもございますが、その辺はちょっとお話の中で触れさせていただきたいと思います。

これはお約束でございまして、必ず最初にこれをやることになっています。研究所の使命でございまして。京都のものづくり文化の優れた伝統を継承し、発展させ、新しい時代の感性豊かで先進的な産業技術を創造する。これは、私どもの研究所の、今は理事長なんですが、初代、研究所になったときの所長が西島先生という方なんですが、その方が考えられたものでございまして。役割としましては、どこの公設試も同じように、中小企業の下支えと成長支援ということです。1から3のミッションというものがあります。特に3番目、伝統産業分野の進展への支援ということが今回のテーマにかかわるところです。

本来業務につきましては、一応六つの柱、われわれは通称、6本柱と言っているんですけども。一番上から技術相談、それから、試験・分析、研究開発、人材育成。私どもが今居ります、知恵産業。今日はあまりこれについてはお話しませんが。それから、研究会というのがありまして、それぞれをバランスよくやっていきましょうということで、六つの柱になっています。

私どもの組織の英語表記を見ていただけたらと思います。ほとんどの研究所は、例えば、私どもで言いますと、「Kyoto Municipal Institute of Industrial Technology」と、だいたいここで終わるところが多いんですが、私のところは最後に「and Culture」というのが入っています。やはり、生活である

とか、あるいはものづくりの文化であるとかというところで、今は何とか文化というのが非常に注目されていますが、そのブームが来る前からこういうかたちで「and Culture」というのを取り入れながらやっていたということでございます。

続きまして沿革ですけれども、これはオフィシャルの沿革でございます。起源としましては、京都市何とかという冠をいただいたというのが、先ほど白須先生も言っていただきましたが、繊維系の方が大正5年です。京都市染織試験場が発足しています。元、私が居ました、工業試験場は、大正9年に京都市工業研究所というところから始まっております。工業研究所につきましては、昭和30年に京都市工芸指導所に改称になったり、あとは、昭和41年に試験場という名前になったり。先ほどご紹介いただきました平成15年に繊維の分野と工業の分野が統合致しまして、京都市産業技術研究所になっています。

それぞれ、場所が違いましたので、繊維の方は繊維技術センター、工業の方は工業技術センターで、平成22年までそういうかたちで運営していました。そして、平成22年に立地的統合が行われまして、今の場所、リサーチパークに建物も変わりました。平成26年から、京都市という名前はいただいています。地方独立行政法人に移行致しまして、今は正式名称、地方独立行政法人、京都市産業技術研究所ということになっています。平成26年から始まりまして、1期が4年ですので、もう1期目が終わり、2期目に入っているところでございます。

続きまして、沿革の明治期でございます。京都において産業というのは、当然ながら伝統産業を柱としたものがほとんどでございました。もっと外国の技術を取り入れたいということになり、明治2年とか、3年とか、それぐらいのころに、特に繊維の場合は技術者をフランスに派遣し勉強させ、そこから織機を持ち帰り、技術を広めたところから始まっています。

1902年（明治35年）、この織物試験場は、業界等からの要望もありまして、京都市と国を巻き込み、西陣織物同業組合と京都市でお金を出して、試験場をつくろうとしたんです。結局、京都市の財政が非常に厳しい状況の中において、京都市が支出するのはどうかということになり、西陣織物同業組合に

よって、設立されました。建物自体は明治42年3月に竣工して、織物試験場が始まっています。

それから、工業研究所の方は名前をいただいたのは、大正9年なんですけれども、起源はやはり焼き物から始まっていて、オフィシャルではありませんが、その起源は明治29年、これも業界から京都市に要望を出されまして、陶磁器の試験場を設立しようということが決定されて、10月に建物が完成しています。最初は試験所という名前だったんですが、明治36年に試験場に名前が変わりました。色々時代が流れて、財政的なところもあったのかもしれませんが、国へ移管されていきます。それをもって、京都市の試験場が、廃場されていると、その跡地を引き続き伝習所へ。伝習所というのは、研修生であるとかへ技術を伝えていくという、今で言うところの研修所なんですかね。そんな感じの施設になって、引き継がれています。7月から京都市陶磁器講習所という名前で業務を始めているということでございます。これが昭和元年に講習所も廃止になって、それまでに工業研究所の中に窯業に携わる技術者もいました関係で、その敷地、建物は工業研究所に移管されたということでございます。詳しいことをお知りになりたい場合は書き物等もございますので、また言っていただけたらと思います。

ですから、明治期から、伝統産業に携わってきています。我々の先輩方の血が脈々と継がれて、今に至っていると思います。その折の京都の市政であるとか、政策なんかも見ていきますと、一言で言いますと、我々の先輩たちがやっていること、考えていることは、その時代、時代に合った、今と同じようなことをやっています。本当に革新的なところを色々追求しながら、技術を向上させるというのをやってきたんだと思います。

今現在私どもの研究所の中には八つの研究チームがあります。ベースとなるのは伝統産業からなんですけれども、それ以外のところもございます。しかしながら、全部が全部まったく伝統産業に関係がないというチームはほとんどありません。例えば、高分子系チームにおきましては、ほとんどがプラスチックとか、ゴムとか、今のはやりとしては、CNF、セルロースナノファイバー関連の研究をやっていますが、昔から京漆器、京仏具の技法であるとか、漆自体の研究もやっています。

最近では文化財の修復も一つの柱としてやるようになってきて、修復技術だけでなく、伝世品などを修復されるときに、どういうものが使われているとか、そういう分析技術を磨いているところもあります。

こちらの金属系チームというのは、ほとんど関係がないかなと思われるんですけども。いわゆる合金作成、製作、合金を分析する。金属を分析するというのが非常に長けていまして、最近のトピックスとしましては、山鉦の鐘鉦（かね）、いわゆる火事で焼失した鉦の一部を分析しまして、どういう合金組成になっていたのかを解析し、復元しているんですね。そのデータを基に、今現在よみがえっているというのもあります。ですから、その他の鉦であるとか、おりんなんかも後で紹介させていただくんですが、いわゆる鑄造技術では割合関係してくるのかなと思います。

窯業系チームは稲田が来ていますけれども、そのものですね。京焼、清水焼というところの技術的なところ、あるいは材料素材、あるいは釉薬とか、そういうライブラリーはものすごい量を持っています。それ以外にはファインセラミックもやっていまして、今2本柱で、研究開発、技術移転などもやっています。研究分野においてはそこに赤字で書かせていただいています、このようなところをやっています。

それから、この製織システムチームというのは、織りの方法、西陣織をはじめとした織物を織るための製織技術をやっています。最近の織りで言いますと、また後で紹介させていただくんですけども、手機を改造したようなかたちで、コンピューターを導入するとか、あるいは技術者（職人）もだんだん少なくなってきて、人手不足を解消するために、何とか西陣の作業にもAIを活用していこうという研究もしているところでございます。

それから、最近のトピックスでは、反物の画像データを取り込むことによって、例えば、百貨店なんかに来られたお客さまに、この反物で着物をつくったらこんな感じに見えますよというような、反物だけではなかなか想像できないんですけども、体にそれをフィットさせて着物のようなかたちで、自分が着た場合、どのように見えるかというソフトも開発しています。

バイオ系チームです。バイオ系チームで代表するところでは清酒酵母の育種ということです。これは後でご紹介致しますが、杜氏さんもだんだん少な

くなっている関係で、管理醸造が色々なところでやられているんです。管理醸造は、どういう成分がお酒を製造していく過程において産出してくるとか、あるいは匂いに関して、どういうものが産出してきたらいいかというのを分析して、ある程度の指標が分かるような分析技術が重要ですね。

高い分析機器を使うのではなくて、比較的汎用な分析装置、ガスクロマトグラフィという比較的最近では汎用装置ですが、そういう装置を使って分析する。管理醸造に用いられるような分析キットであるとか、分析手法なんかも開発しているところです。

表面処理チーム、これはめっきです。めっきとなりますと、我々のところでは電気鑄造というのでやっています。例えば、これは金具とか、飾り金具なんですけれども。最初に型を作りまして、その型に対して、銅を析出させていくことによって、金具等ができます。職人さんに最初に型を作ってもらい、それを利用して、電気鑄造でそういう飾り金具もできます。古くは、仏像などは、湿式めっきでやっていた。歴史的にはそういうところから始まっている技術です。最近はこの比較的大きなものから、本当に微細なものをつくる技術もかなり進んでいまして、表面処理チームにおいては、最近ではナノオーダーの表面処理もやっているところでございます。

これはデザインチームです。今日は竹浪が来ていますが、基本的には工芸、あるいは品物、そういうプロダクトデザインであるとか、グラフィックデザインであるとか、テキスタイルデザインなどを主にやっています。伝統工芸におきましても、最近ではCGを使ったり、あるいは3Dであるものをスキャンして、それをまた3Dプリンターで形を出力して、それに対していろいろなものを加飾したりしています。それとは別に、今度は3D技術を用いたところで、例えば、レーザーを利用して色々なものを加工するというのは昔からやられているんですけれども、そういう技術を工芸の分野でも応用しているところですね。最近では古い文様を整理して、それを現代のものにモディファイした文様を提案したり、そういうこともやっているところです。

色染化学チーム、これは染めです。伝統産業に関しましては友禅とか、染料であるとか、染色の技術です。テキスタイル全般の技術開発もやっています。最近では手で染めるのではなくて、インクジェットの捺染技術であるとか、

顔料の耐候性を持たせたりとか、そのような技術もやっています。まだ一生懸命やっているところもあるんですが、ちょっとこれは言えない部分がありますので、いわゆる絹織物を何とか現代に使いやすいようにするための研究もしています。

それら八つのチームが色々な研究をやっている中で、少し紹介させていただくものがこれでございます。ちょっと古いんですが、これは片側紗風通と言いまして、一番ベースとなるのは、西陣織の織物でございまして。真ん中に色々な文様が入っているものを織って、一番上側に透けるような織物が織れるような技術なんです。これを機械でやりますと、高性能な電子ジャカードというものをを用いるのが一般的です。これが1台数千万円ぐらいするものなんです。そういうものをを用いなくても、いわゆる一般的なメカニカルジャカードを用いてつくることができます。詳しいことはその辺りのところに書いてあるんですが、比較的導入もしやすい。非常に意匠性もいい。なおかつ、製品になったときも見栄えがするような、こういう織物ができるようになっています。

ここに書いてありますような、生地の手織りと、あと、透けて見えるような紗であるとか、あるいは紋を入れるとか、その三つのバリエーションを自由に組み換えることができる意匠性の高い織り方、織物ができるという技術を開発しています。その他、例えば、スリットアニメーションができるとか、それを利用して着ていると柄が動くような織物ができたりとか、そういうものをやっていますね。

京都においてはお酒も伝統産品でございます。それは昔からやっているんですけれども、だいたいの伏見の酒蔵さんでお酒を仕込むときの酵母、酒用の酵母の分譲は、昔から先輩方がやられていまして、今もやっています。伏見の酒蔵さんが弊所に来られまして、酵母を買われて、そこからお酒を醸造されます。

従来の酵母ではなくて、その飲み方を提案するような、あるいはこの酵母でやるとこんな感じのお酒ができるというのをイメージしやすいような、酵母自身にどういう性質があるのかを明らかにしています。例えばここに書いてあります、「京の琴」、「京の華」は、匂いが非常にいい、フルーツのよう

な、ちょっと前にはやりました大吟醸とか、そのような感じの非常に軽快な飲み口になる優良な酵母です。優良株を分けて育てるという操作を何度も行ってつくったのがこの酵母でございます。また後で実際に製品になったものを紹介していきたいと思います。

これがだいたい研究チーム、8チームのものでございまして、後で紹介していくものをちょっと前段で紹介させていただきました。これが研究開発です。

また、ものづくりの担い手を育成しています。専門の研修所は全国にも結構ありますが、研究所の中でもものづくりの担い手育成の研修をやっているところは非常に少ないと思います。たいていの研修コースが昭和50年から始まっているんですが、それ以前から始まっているのもあり、延べ1万3千数百名を超える修了生がいます。

コースとしましては次のようなコースがありまして、例えば、陶磁器コース、陶磁器応用コースは、だいたい15名前後の研修生がいます。これだけではなく、釉薬の実務者研修があり、毎年8名程度受講されます。釉薬は、配合、焼き方によっていろいろな色が出ます。それを実際に配合から始めて、焼いてみて、どんな感じの色が出るか。それを実習しながら、自分のものにしていただく。

研修生もこのような実習をやりますので、生きた、生のデータがずっと蓄積されています。今、ピースは何種ぐらいあるかというと、毎年3万ぐらい。それが長年にわたっていますので、ものすごい数の、生のデータです。実際に焼いて、こういうテストピースで仕上がった実際のものがあります。すごい財産だと思います。そういう蓄積したものがあります。

陶磁器の研修については明治22年ぐらいから、それぐらいから始まっているのが、脈々といまに続いています。さすがにそのころのテストピースはありません。このような研修をやっています。

それから、これは私が所属していた研究チームの漆工コース、漆工応用コースと言いまして、だいたいスペースの関係で8名から6名ぐらいの研修の人たちを集めまして、やっております。いずれもプロの養成で、カルチャースクールではありませんので、追い込みの時期になったら必死にやっ

ています。それに職員も付き合っ、朝昼晩、試験場でご飯を食べるということも昔は度々ありました。漆工コースには、基本的な技法から加飾に至るまで一通りやりまして、応用コースは加飾を中心にやるというコースです。

次は友禪のコースです。これも基本コースとプロ養成コースというのがあります。同じように実習を伴うものでございます。この友禪に関しましては実際にどこかの工場で実務されている方がいらっしゃいますので、夜の開校が多いコースになっております。

これは専門コース、色々なテーマを設けまして、それぞれの個別のテーマで実務を含む実習をやっているというコースでございます。

西陣、これは織りですね。実際に織機を動かす通常コースと講義課程、要するに座学だけのコースと、実務・実習を伴うようなコースでございますね。実際のこちらにありますような織機を使って、色々な技法を習得するというコースでございます。

染色コース、これは伝統産業だけに限ったものではございませんが、テキスタイルも含めた実際にファブリックを染めて、それを定着させてというような実習を伴うコースでございます。

この「きもの塾」は着物の基礎的なコース、応用コースも含めまして、どちらかと言うと、商売ですね。商売で品物を売っている、あるいは流通に携わっている方たちを対象に、着物はどうやってできているのかとか、織り方はどうなっているのかというような、基本的な内容を習得していただくコースになっております。これは、担い手支援において、そういう実習を出られた方の生活をいかに支えていくのか、あるいはどうやって盛り立てていくのかということになります。

皆さま方もよくご存じのことですが、京都の伝統産業が直面する課題というのは、需要の低迷、あるいは技術の継承をどうしていくのか、後継者をどうしていくのかという背景があります。そこには、ここに書いてあるような生活様式や生活空間の変化、大量生産方式による安価な生活用品の普及などがありますね。それで私どもがどうするかというのが、今まで述べたようなところでございます。伝統産業を活性化するために盛り立てていきましょう。

特に、ここからのお話は、研修を出られた若い担い手をどう支援していく

かでございます。そういう人たちに對しまして、色々なセミナーをやっております。平成 25 年から「世に出る伝統産業技術セミナー」を様々なテーマを設けてやっていました。その若い担い手たちが自立するために、様々な課題について議論していく中で、弟子入りできる工房が限られているとか、自立を余儀なくされるケースが増加している。要するに、もっと技術を学びたいんだけど、弟子入りできるような工房が非常に少ない。そういう中で、すから、個人で技術を鍛錬、錬磨していくのはなかなか大変。ものづくりしながら、自分で食べていくために営業活動をするのはなかなか難しい。自己技術に特化したプロダクトアウト型のものづくりになる傾向。つまり、こういうものができました。いいでしょうと言って世の中に出しても、自己満足になってしまって、なかなか売れないというような現状ですね。

我々のような支援団体、あるいは機関がありますけれども、それぞれがそれぞれの情報を出しているだけで、交流がなかなか難しい。所属団体もそうです。一つの何とか組合というところで固まってしまって、その中の青年会で固まってしまって、交流を持てる機会が非常に少ないというところがあります。

先ほど言いましたけれども、支援機関においてもそうです。やはり最近はいよいよ連携を取ろうとしていますけれども、なかなか実に至っていないところがあります。お互いに助けてもらいたい情報だけは来るんだけど、最初からの情報はなかなか来ないような状況があります。

そこで各支援機関と連携しながら、若い担い手に有用な情報を画一的に流すようなプラットフォームをつくっていかうと今動いています。これは仮称ですけれども京もの担い手支援プラットフォーム、まだちょっと広報前でございますので、正式名称は言えないんですけれども 3 月 13 日に広報予定でございますので、着々と今やっております。仮称プラットフォームがどういうものかと言いますと、45 歳以下の京都府域に活動拠点を持つ伝統産業、京ものに携わる若い担い手を中心。実務経験が 2 年以上という縛りも入っております。各機関が連携しまして、補助金、セミナーだけではなくて、こういう何々がありますよという有益な情報を流していき、その情報を得るためにプラットフォームに登録していくようなかたちの働き掛けもするんです。

概念図としましては、ここの丸いところに色々な若い担い手が所属するよ
うな、コロニーがあるんですけれども、その方たちにこういうものができま
すから、登録しませんかという働き掛けは今やっているんです。それ以外
の方にも、当然色々な方の知人を通じまして、その若い担い手がプラッ
トフォームへ登録できます。

それに対しまして、一番左側に京都府を始めとしまして、色々な支援機
関があります。これらは連携を取りながら情報を取りまとめる事務局を産技研
がやるつもりです。情報をいただいて、それらをプラットフォームに流して
いきましょと。

やることとしては、展示販売。これは今もやっているのです。特に春先、
秋口になりますと、そういうお声掛けをいただくところがあるんですけれど
も、各団体だけではなかなか賄いきれないこともあるんです。そういうところ
もありまして、広く声を掛けていこうと。

あと、例えば、応援してあげようという企業がありまして、こういうもの
を作りたい、あるいは欲しいという依頼があった時、企業が思っていらっ
しゃるニーズに合ったようなものなので、ものづくりのコンペティションを
して、企業に選んでいただくものをやっていこうというものもある。

それに対しまして、製品開発は、一部我々が入ったりする場合もあります。
イメージ図ではこんな感じですね。企業ニーズを事務局が取りまとめまして、
エントリーした若い担い手に情報を流して、そこからまた私はこういう作品
で応募しますというものが来ましたら、企業にこういうものがありますよと
ご紹介、あるいはここでコンペをやるわけです。

企業に選んでいただいて、そのまま製品になる場合もありますが、こうい
うところをもうちょっと工夫していただきたいということになりますと、製
品化までに技術サポートに入ったりします。それで企業に納品するようなイ
メージですね。

その他に若い担い手同士の交流を持っていただこうと思っています。

大量受注はなかなか難しいんですが、ただ、企業の周年事業でこういう形
のものを 100 枚とか 200 枚とか欲しいとなりますと、個人でやっている場合
は追いつかない。特に焼き物は多いんですけれども、ある程度形が決まった

もので、絵付けは、同じようなテーマで多少つくり手が変わっても大丈夫だよというようなものもありますので、そういうものは比較的交流を持っておけば受けやすいものがあるのかなと思います。

それから、登録していただいた方を色々なところでプロモーションしていく事業です。これはコンペティションの一例です。営業（プロモーション）活動をしていたんですけれども、小川珈琲からこういうニーズがありました。友禅のメニューカバーをつくりたいということでしたので、友禅に携わる若い担い手に希望要件を出して、エントリーしてきたものについて支援させてもらって、それぞれ品物を見せながらプレゼン審査をして、採用になってという流れです。

あと、これは「京ものエントリーモデル」と言って、比較的若い担い手がコンセプトを決めまして、京ものに初めて触れる方に向けて製品をつくりましょうと。これはデザインチームもかなり関わって、2年がかりで色々やっていった事業です。この事業でインテリアライフを始めとしまして、百貨店などで出店しますと、引き合いと言いますか、かなり反響がありました。ある百貨店で出した場合、このしつらえのまま、うちの百貨店でも出してほしいというお話もありました。ターゲットは30歳代から40歳代の女性で、初めて京ものに触れて良さを感じていただくような、ちょっと粋な秋のひとつときを楽しんでいただくような、そういう製品を集めたものでございました。

これは今でもやっておりますが、永楽屋さんという四条河原町の佃煮とかお菓子を販売されているお店の2階の喫茶コーナーで、弊所の研修生のOB・OGの作品を展示販売させていただいています。さらに、オンラインショップ「京もの専門店『みやび』」というのがあるのですが、そこの特設サイト、「京の一番星☆彗」、この名付け親はロゴも含めまして私なんですけれども、このサイトで販売しております。たまに結構な枚数が売れたりします。一番左側の赤い酒杯、銘々皿ぐらいの大きさものなんですけど、ある企業の目に留まりまして、周年事業の記念品というので、そこそこ出たものでございます。

その他になりますと、私どもは研究会という組織があります。（図が）小さくて恐縮ですが、各技術分野において、それぞれ技術の交流であるとか、

若手を中心とした技術者の交流を深めていこうという目的で設立しております。

他地域で、何々研究会というのもたくさんあります。例えば、塗装では、「難塗装物をどうやって塗装していくのか」という、技術課題に関した研究会というのが非常に多いです。ところが、弊所のように例えば、工芸に関した研究会、染色に関した研究会、などそれぞれの技術分野、業界に直結したような研究会というのはなかなか少ないんです。ですから、我々にとっては、これが京都市域における小さな業界と言っても過言ではないと思っております。ですから、業界が望んでおられるニーズとはどういうものであるかは、各研究会の会員とお話ししたり、研究会の会合に出ていってお話することによって、京都市域の業界が望んでいる技術課題などを手に入れることができるという、我々にとっても非常に合理的に小さくまとまっている業界でございます。それを取りまとめて、異業種交流等々もやっています。

試作事業も、これまでやってきておりまして、3年前になりますか、100周年で記念モニュメントという、弊所の入り口に大きな時計がありますが、その文字盤をそれぞれ研究会に参画していただき、研究会の技術で作成しました。酒造だけがちょっと違うんですが、お酒造りを想像できるようなものになっております。結構いいものだと思いますので、もしお越しになる機会がありましたら、見ていただけたらと思います。これが我々の日常業務としてやっている、伝統産業に関わるようなところ業務でございます。

続きまして、我々の研究開発した技術等が、企業と結び付いて製品になったものです。これらは先ほど述べました酵母「京の琴」、「京の華」、「京の咲」です。この「京の咲」というのは、匂いが強く出るのではなくて、冷酒に向くような口当たりが非常に軽快でいいものになります。それから、最近「京の珀」というのがありまして、燗酒に向くお酒ができる酵母です。それはコハク酸という酸が多くつくられ、温めますと非常に味わいがいいお酒になります。齊藤酒造のお酒で採用になっているものでございます。

それから、これは染めの技術を革に転用したものです。私どもが関わった技術は革への染めの技術です。普通に繊維を染めるようにはなかなかできなかったんです。糊も革を染めるための糊の検討、蒸し時間、蒸し温度、そう

いうところは結構試行錯誤しながら生まれたものでございます。この染めの技術を応用して、製品化されました。京都レザーは色々なメディアに取り上げられていますが、基本の技術の4分の1ぐらいが、私どもの研究所で携わった技術でございます。

これはシリカモノリスという、株式会社エスエヌジーが開発した、元々物質を分けるための分析機器などに用いられるカラム担体というものです。非常に高性能なポーラスなクォーツがあったんですが、それをデザイン性のある、分析用具以外のところで展開したいというご相談がありました。これは、今日来ています、窯業系チームとデザインチームが関わって、そのポーラスクォーツが持つ性質を100%いいところを出しながら、伝統産業の技術を取り入れて、デザインを含めて検討しました。材料は丸いディスクなのですが、そのディスクも非常にもろくて硬く、加工するのが大変で、それを加工するための技術指導等をやりながらこのような製品になっています。これも改良版が今出ておりまして、色々なところで展開されているところでございます。

これは、りんよ工房というおりんを作っている会社の例でございまして、おりんで何か商品開発をしていきたいということで、デザインチームが関わって企画立案から始まりまして、形に仕上げるために金属系チームも関わりながら、おりんを自転車のベルの形にしていって。一言で言うとうそうなんです。「おりんのように音がずっと残るためにはどうしたらいいのか」ということで、形をつくるには大変苦労したものでございます。これは今弊所の展示室に展示しておりまして、実際にベルを鳴らしていただくこともできます。立ち寄られたときに鳴らしていただくと、後ろから鳴らされたとしても、うるさいとはなかなか思わない、非常にいい響きのおりんでございます。ただ、値段は非常に高い印象でございまして、5万円ぐらいですかね。ですから、付ける自転車もちょっといいものに付けないと。あるいは普通の自転車でも駐輪場に止める時はおりんを外さないとみたいな感じの。でも、非常にいい音ですので、もし機会がありましたら鳴らしていただけたらと思います。

これは我々が携わりました漆塗りのエレベーターでございまして、材料としての漆を耐候性のいい状態に改質したものということでございます。最近はこの世代の漆から、次の世代になっています。もう少し高分散で、艶が非

常にいいという漆も開発しております。この次の世代の漆については、私が開発に携わりまして、特許になっており、今商品化に向けて頑張っているところです。弊所のエレベーターはその一世代前のものでございまして、上京区役所のエレベーターのほか、まだ広報前では言えませんが、ある場所にも採用される予定でございます。ただ、これは扉1枚が100万円ぐらいします。弊所においては、大きな方の扉が4枚ありまして、小さい方に2枚ありますから、約600万円ぐらいかなというところですよ。

それから、これは窯業系チームが関わりました風神雷神の陶板ですね。陶板は、ちょうど右側にあります白い部分なんですけど、普通一般的な陶板というのは、ある程度の厚みがあり、重さがありますから、大きな面積のものを作成するのはなかなか難しいんです。例えば、京都駅の「はるか」が着くホームの大阪側の外れに大きな陶板のようなものがあります。それはよく見ていただきますと、パーツ、パーツでそれがはまっているような状況になりますので、かなり分厚いものです。これはそこにも書いてありますように、焼き上がり厚さは3ミリで、なおかつ畳1畳分ぐらいの大きさになります。これが反らずに、真っすぐゆがみがなくできる。使っている材料は粘土系が少ないので、後ろからの光が通るような状況になっています。これは後ろに表具がありますから、光は通らないんですけども、それと同じ素材で作られたものが、その陶板の手前側の説明パネルと、弊所の2階ホールの一歩窓側のところに衝立があります。天気の良い日は、窓側から光が入って、光が透けて非常に趣があって良いものでございます。そういう技術で作っていただけますので、畳1畳分ぐらいの大きさになりますと、そこそこの値段はします。ただ、下に紹介しています小さいものでしたら、比較的小安くなるかなと思います。

この辺が私どもの技術を用いて製品になったもののご紹介でございます。スライドは以上でございます。

技術課題は色々ございます。やはり、冒頭申し上げましたように、試験場と言われている時代から研究所に至るまで、技術者、あるいはそこに携わっている職員は、その技術で何とかいいものを作っていこうと日々努力しています。課題としては、中盤で申し上げましたように、なかなかものが売れな

い、技術者がだんだん少なくなっていくことがあります。私たちは、ぶれずにその技術をどう伝承していくのか、保持していくのではなくて、発展させていかなければいけないということです。

今はものが多様化しておりますので、伝統技術を用いたものを素材として他分野で使えるもの、あるいはその逆で新素材を伝統のものにどう取り入れていくかを考えることも大切だと思います。道具の面では、だんだんなくなっていく道具をどう維持していくのか、あるいは新しいものにどう切り替えていくのかを国レベルでも研究していこうとしている現状もあります。私どもも色々調べながら、置き換えられるものを検討することもやっております。

伝統産業に携わっていく人材をどう育てていくのか。これについては世の中には美術系の大学があり、専門学校があり、私どものような研修施設もありますから、担い手はたくさんいるのです。その担い手の中でプロをどう育てるのかは、我々の研究所が担っているところなのかなと思っています。ただ、情報は非常に多様化しています。AIをどう取り入れていくのかというのもありますが、しかしながら、基本となるのは本物の技術でありまして、「なんちゃって」では駄目なので、そこをきっちり押さえた上でのモディファイになるかと思います。基本はしっかりと押さえていかなければいけない。それについて我々は、今の研修をバージョンアップするにしても、最初の基本をきっちりやらないといけないと思います。

それから、現代のライフスタイルに合ったものをつくることも大切だと思いますが、私は携わる人間として、これはいいものだというのは、正確に伝えないといけないと思います。確かにライフスタイルに合わせていくのは必要なかもしれませんが、例えば、私が今啓蒙しているのは、漆を何とかいいものとして伝えることです。ただ、やはり高い、高いけれども、本物の良さを味わっていただきたいので、比較的安いスプーンやカレースプーンです。フォークではなかなか感じられないですが、金属のスプーンを使っていらっしゃる方にきっちと漆が塗られたスプーンで、例えばカレーを食べてもらうと、すごく口当たりであるとか、良さを味わっていただけると思うんです。次はおわんですね。おわんも加飾がすごいもの以外のもになりますと、比

較的安価な値段で買えますので、そういう手順での啓蒙と言いますか、そういうことをしばしばやっています。

今日もこういう場で、これぐらいの人数でという情報がありましたら、ひょっとしたらスプーンぐらいはそろえられたかなと思います。スプーンは2千円前後ぐらいでお買い求めいただけると思いますので、あいつがそう言っていたから1回やってみようかと思われる方がいらっしゃったら、是非やっていただきたい。かなり違いますね。もう金属とは全然違います。

あとは陶磁器も、今若い子が色々なものをつくっていますので、そういう展示会に行きますと、きちっとした絵付けのもの、しっかり描いているもの、あるいは現代風のものもありますが、私どもの研修生、研修修了生の作品は、基本をきっちり押さえながらやっておりますので、結構面白いものにしても、しっかりものをつくっている。ですから、やはり基本は大切であると思います。

あと、何があるでしょう。何かと何かを組み合わせ、こういうものができましたというのもよく相談に来られるんですが、そうしてつくったものはなかなか長続きしないと思います。最後まで残るのは、やはり本物になると思うんですね。ですから、それをどうやって守っていくのか。日本人ですから、日本の文化をと言いますが、だんだん畳の部屋が少なくなって、フローリングの部屋が多いという時代になりました。だけどまた和室が欲しいねという要望も出てきているという昨今ですので、やはり和室に合うとか、和洋で合うようなライフスタイルを提案できるような品物づくり。「なんちゃって」ではなくて、本物でそのような品物をつくる。

あと、自分がやってきた仕事に関して、つくり手自身もそうですけれども、ストーリーが求められますので、そういうところをしっかりと述べられるような技術者、あるいはつくり手を育てていきたいなと思います。

明治期から海外で色々なものを展開したという時代があります。今も海外に展開していこうという機運で、色々行きますが、やはり、持って行っているものは本物だと思います。かたちは変わっても、使われている技術は本物のものが多いと思います。ですから、海外でも本物を持って行って、しっかり説明できるようなところで、京都市においては、伝産課も色々力を入れて

やっていらっしゃいますし、支援機関においては、京都府もそうですし、商工会議所もそういうところをやっていらっしゃいますので、そういう機関と連携しながら、世の中にそういう子たちを出していきたいなと思っています。

素材につきましても、偽物ではなく、現状に合うような、今風の素材を何とか開発すべく、例えば、稲田とかは一生懸命やっているわけです。焼き物につきましても坏土がだんだんなくなってきているという現状があります。それをどうリカバリーしていくのか。今まで作られていたものと同じようなものがどうしたらできるのか。あるいは今までにない素材、なおかつ京焼、清水焼をどうやって提案していくのかというところが、我々に課せられた責務なのかなと日々感じているところです。

雑ばくなお話になりましたが、取りあえず私の話はここで一旦終わらせていただこうと思います。ありがとうございました。

(講演終了)

司会 安藤さん、ありがとうございました。京都市産業技術研究所が、いまのお話で伝統産業と歴史的にも非常に深く関わっていて、最近特に新しい動きなんかはかなりお話いただきました。せっかくの機会ですから、8時ごろまで質問、意見交換の時間にしたいと思います。どんなことでも結構ですし、何かいまの質問でこういうことはどうなっているのかというのがありましたらどうぞ。

参加者1 大変面白いお話をありがとうございました。京もの担い手支援プラットフォーム、勉強してもなかなか仕事がないということでした。京都のいろいろな伝統産業の中にある分業構造と担い手プラットフォーム、担い手さんは分業の一工程を担当するような関わりになって、そこの中に組み込まれるのか、それとも産出全体をまとめるような、その全般を担うのか。分業構造も崩れつつあるというようなことも聞くんですけども、そういう分業構造の変化と、産業技術研究所の関係についてお聞かせいただけませんか？

安藤 分業構造で制約されている方というのは、なかなかプラットフォームに登録できない可能性があります。ただ、例えば分業の中では和装が中心になるのですけれども。和装の仕事はその中でやられているんですが、和装以

外の展開というのは、分業の構造で制約されることなく、自由に活動されている方もいらっしゃいます。和装以外のものを作っている、その中で例えば、仲間でユニットを組んで製品を作っていたりとか、活動なさっている方もいらっしゃいます。ただ、やはり分業体制というのは、今まだしっかりとありますので、そこに所属されている方はなかなか難しいというのもあります。

また、織りとかの場合は一人でやっていらっしゃる方もたくさんいらっしゃいますし、染めに関しましても一人でやっていらっしゃる方もいらっしゃいますので、そういう方たちはたぶん登録なさる方もあるのかなと。

ですから、個人個人によって、置かれている立場によって、登録される方、登録されない方というのはあるかと思います。ただ、このプラットフォームは1年、2年、3年で終わるようなことは考えておりませんので、交流の中に色々な展開が出てくるのかなとは思っています。

わかば会とか、そういうようなところでしたら、分業体制の中に入っている方も、登録された方がいらっしゃいますので、情報はたぶん行くかと思いますが、そういう分業体制で制約されている方でも、このプラットフォームに登録してはいけないとはたぶんならないと思います。

ですから、その所属団体、組合等には説明しているつもりですので、登録者次第というかたちにはなろうかと思っています。親組合には、こういうことをやろうとしているんだという説明は、一通りしているつもりです。細かいところまではなかなか行き渡っていないというのはあるかもしれませんが、その辺は今後フォローしていきたいなと思っています。

司会 ほかにどうでしょうか。どんなことでも。

参加者2 私的なことを伺ってもよろしいですか。私が何か技術が欲しいなというときは、気楽にお電話するとか、何かで受けてくださるわけですか。

安藤 研究所というのは、敷居が高いイメージがありますが、取りあえずご相談いただいて、そこでご相談いただいた方のご希望に沿うには、どうなのが一番いいのかなとお話しながらにはなるかと思っています。

参加者2 民間でどれぐらいそういうお問い合わせは。かなりの数。

安藤 正直なところを言いますと、個人の問い合わせより企業の問い合わせの方が多いです。あと、実際に個人の問い合わせは何件くらいあるかな？

件数としては 100 件までぐらいです。

参加者 2 やはりわかば会というか、こちらを卒業された方がこういう機関があるというのはよく分かっていらっしゃるから、ご相談に行きやすいですね。それ以外の方はなかなか敷居が高いようなイメージがあるんですけども。それは私の不勉強というか。

安藤 そこが私らの弱点でして、よく言われるます。色々なところでお話させてもらえる機会があれば出ていって、知恵産業融合センターというのは、割合外向きの仕事でございまして、色々な展示会であるとか、お話しする機会というのは、以前から比べるとだいぶ増えてきたかなとは思っているのですが。まだまだ足りないところでございます。もし何かご相談ごとをお持ちになったら、気軽に電話いただけたらと思います。

参加者 2 代表窓口ですね。

安藤 はい。代表窓口で。電話でもメールでも。私へはメールがいいかなと思いますし。

参加者 2 学生に時々こういう機会がありますよという紹介するので。授業で問い合わせたら、もしみんながベンチャーでやりだしたときに、相談できるからと言っているんですけども。それでいいのかなというのが。

安藤 学生さんで、例えば。

参加者 2 社会人になってからの話ですけども。

安藤 例えば、ある程度の人数、一人、二人でも大丈夫なんですけど、一度見学にということで言っていただきましたら、スケジュール調整しまして、ざっと一通り見ていただくかたちになるんですけども。そういうのも随時やっております。ご遠慮なさらずに。今日はせっかくのご縁でございまして、問い合わせいただけたらと思います。

参加者 2 すみません。私ばかり質問して申し訳ないんですけども。もう 1 点だけ伺いたいことがあるんです。この前、漆の佐藤さまのときに、特許を開発されたと伺って、こちらが持っていられると伺ったんですけども。その特許使用料みたいなものはどれぐらい取られるんですか。

安藤 正直なところ、それについては、私どもが開発して特許を出して、それがある企業がその特許を丸ごと買っていたけましたので。そうなります

と、その企業がそれで製品をつくられます。そういう製品をつくりたいとなりますと、今度はその製品をつくるためのライセンス契約ですから、企業との話になろうかと思います。

参加者2 すみません。ありがとうございました。

司会 はい、どうぞ。

参加者3 工業試験所さんですから、デザインはいわゆるその作家さんが中で色々つくるのではなしに、工業製品をつくるデザインというふうに考えてしまうんですけれども。京都市産業技術研究所さんの育成プログラムなんかをお聞きしていますとね、どちらかと言うと、作家さんと中間的なデザインの研修もされているのかなという、そういう感じを受けたですけれども。その辺りはいかがなんでしょうか。

安藤 デザインというのは、本当にすごい広い意味がありまして、どちらかと言うと、プロダクトデザインに携わっていたものばかりがおります。

なおかつ、その中で得意分野がありまして、プロダクトデザインというのは、あらゆる材料からその辺のところまで全部コンセプトから考えられるということで。結局題材が工芸品なのか、あるいは工業品なのか、あるいはそれではなくて、色々なものを見ていただくためのこういう広告媒体なのか、その辺も含めまして全てのところのデザインはうちでできます。工芸だけに限って、あるいは工業製品だけに限ってではなくて、あるいはソフトサービスぐらいまで、もっと慣れてくれば、その辺ぐらいまで発展しつつあるところでございます。

参加者3 デザインチームさんは何人ぐらいいらっしゃるんですか。

竹浪（産技研デザインチーム） デザインチームで今6名でやっています。専門で安藤からのご紹介もあったとおり、繊維と工業が立地統合してというのがあったので、もともと繊維の方でデザインをやっていたものと、工業試験場でデザインをやっていたものがありますので、大きく専門は二つに分かれますが。

私は工業の方なんですけれども、もともと民間のデザイン事務所でプロダクトデザイン、液晶テレビのデザインとか、家具とかロボットとかのデザインをやっていたんですけれども。縁あってここに来て、工芸のデザインなど

をすることが多いので、やはり商品企画であったり、できたものを広告する上でパンフレットとか、ポスターなんかのデザインをトータルでやっております。研修にも私は講師として何コマか入るんですけども、そのときには企画立案とか、プロデュースとかをやらせていただいています。

参加者3 どうもありがとうございました。

司会 私も1点よろしいですか。今、文化庁も来るということで、非常に伝統産業も注目を集めていると思うんです。だから、全体としては非常にいい環境にあると思います。

人手不足が世の中全体で言われていますでしょう。先ほど安藤さんの話にありましたように、伝統産業と言うと、私の理解では色々学校もあって、なりたい人はたくさんいるけれども、なかなか食べていけないから、離れていくということです。昭和40年代は暗いとか、待遇が悪いというので、伝統産業に人が集まらないというので、京都市の伝統産業の本を読んでも人が集まらないし、どうしたらいいんだみたいな話になっていたんですけども、あまりそういうことはないのではないかと思います。その辺りはどうですか。人手というか、携わる人が将来伝統産業でも不足する可能性というのは出てきますかね。

安藤 どうなんでしょうね。でも、今、本当に先ほど申しあげましたように、担い手とかはたくさんいますので、人手不足というのはなかなかないかと思うんですが。ただ、要はその方たちに携わってもらう仕事がない状況なんです。ですから、今も悪い方のスパイラルになっています。ますますそうだから、そういう技術の継承もなかなか難しいような状況になってきて、なおかつ、ものが出なければ道具も出なくなってくると、その道具をつくっていらっしゃる方も高齢になって、その道具が出なかったら、それがなくなってしまうと、それがやりたいんだけど、道具がないというような状況になっていますね。ですから、「どうしていったらいいのか」という問題は、何とか売れるような商品を作るというのが一番簡単な方法なんですけれども、それがなかなか難しい。

今ちょうど白須先生がおっしゃいましたように、今まで日本人は、文化はいいものだと分かっていたんですけども、それをこう生かしていくんだとい

うのがなかなかできない状況だったんです。最近はその文化を何とか産業だとか、その辺のところに結び付けて、一番手っ取り早いのは、環境、観光は昔からやっていたんですが、それに何かを付けてというような状況になっていますので、そういうところの需要は若干出てくるのではないかと思います。

今よくやられているのは、日本人、外国人を問わず、体験というのが結構ありまして、ただ、色々な寺社仏閣を回って、観光するだけではなくて、そこで体験工房なんかに行って、それでなおかつ体験していただいてというところ。その後、やはり本物を買いたいというところにだんだんできていきますので、そこをどううまく活かせるかということです。

体験工房も限られたところがありますので、オフィシャルな話ではないんですけれども、小学校の廃校になったスペースを利用して、そういう体験型工房を設置し、若い人たちに集ってもらって、そこでものづくりを2年なり3年なり、インキュベート期間ではないですけれども、研鑽してもらう。そういう工房の中で、客に体験してもらうも含めた状態で、そのような動きができないかというのはあるんですが、オフィシャルではなかなかできないんですが、そういうのも一つありかなと思いますね。

司会 確かに伝統産業と観光は、これから結び付きやすいですね。

安藤 そうです。

司会 体験も観光と結び付けて。その体験した人がいいなと思って。レンタル着物もそうですね。

安藤 そうです、そうです。

司会 いいなと思って本物につながっていったら非常に可能性がありますね。

安藤 そうなんです。それで体験型のツーリズムもあるんですけれども、そこを受け入れてくださるところも限られたところになってしまいますので。だったら、もう少しそこそこきっちりしたものを作れる人たちが、仕事をしているところを見てもらいながらというのも一つありなのかなと。

ただ、そうなってくるとスペースがないという問題があったんですが、最近では例えば、小学校をどう活用していったらいいかといういうのもありまして、それが全部はできないかもしれませんが、そういうのも活用しながら。そこでまた人も寄ってこれたら、また別の何かもできるのではないかなと

思います。人に集まってもらえるような核となる、そして、地域も活性化できるような、そういうところにもつなげられないかなと思ったりもするんですけれども。

司会 なるほどね。

安藤 ものづくりの企業に入ってもらってとか、オフィスが少ないからオフィスにするというのも一つの方法かもしれませんが。そういうのも考え方としては面白いのではないかなと思います。

司会 ほかにどうでしょうか。

参加者 4 関連して一つよろしいですか。さっきのおりんの話がありましたね。これは実際に開発された後、状況は今どうですか。結構売り上げが伸びているとか、開発はしたけど、いまいちだとか、何か色々あるかと思うんですが。

竹浪 おかげさまで売れています。売れていますが、いままでのおりんとちょっと違って、ネジ穴を開けるとか、加工が非常に難しくて。しかも、おりんメーカーさんなので、きちんといい音が鳴るかという品質管理がすごく厳しくて、歩留まりがあまりよくないので、あまりもうからないとは言っていました。そんな高いものですが、もうからないんです。白井さんがつくっている白井ベルと言うんですが、白井ベルと言ったら白井さんと言って、お客さん呼び込めるようになれば、本業のおりんも売れるのではないかという、一つの窓口として機能しているということで、やはり目を引くものなので、そういう役割も果たしているかなと思います。

参加者 4 今の質問をさせてもらったのは、数年前にフランスのエルメスに寄せてもらったときに、実際に本物をつくっていらっしやって、皆さん、お待ち状態と。職人さんも若い人がいっぱいいて、個々に思い思いにつくっていらっしやると。そういうふうな企業が京都にそれなりに出てくれば、雇用の心配とかいうのがだいぶ軽減されますよね。エルメスももともとバッグだったところが、かばんにというふうに変わっているんで、今のおりんの話でも、別に昔ながらのおりんにこだわらずに、ベルの方にざっと行ってしまっても、選択肢としてはありなのかなと。着物、友禅とか西陣織に関して、何かそういう展開が可能で、かつブランド力をアップできるような方向とい

うのも、一つの選択肢としてあり得るのかなと、ずっと最近思っていたりするんです。

京都の場合はそういうのにこれまで取り組んだことがあるのか。そもそもあまりそういう発想はなかったのか、どんな感じだったのかなというのが気になるところで。わりと伝統工芸、漆器とか着物とかというのにこだわっている感が強い感じがしなくもないんですけども、その辺りはどう捉えていらっしゃるのかなと思って。

安藤 逆に逸話としましては、例えば、国の施策の中で、伝産法はたぶんご存じだと思いますけれども、それが策定されるときには、京都の業界は非常に尽力して伝産法ができた。できたけれども、結局、京都のものがなかなか伝産品にならなかったというところがあります。

そういう技術革新とか、機械化であるとか、当時で言えば、手仕事で何とかでというくくりがあって、京都はそのときにはもう機械化を何とかしようとか、合理的に何かをつくろうという、そういう技術レベルを追求するというのは昔からやられていたところなので、それがあだとなって、京都のものが伝産品として指定されるところが他府県より遅れたというぐらいなので。何々にこだわっている。確かにこだわりがありますが、新しいこと、新しい技術を何とか入れていこうというところは結構敏感ですね。

ただ、私は京都人ではないので何とも分かりませんが、京都人的なところというのは、取りあえずやられたのを見て、ではそれで行こうというところもあります。非常に軽薄な表現ですが、どれだけ成功例を見せていけるかというところになってくるのかなと思います。

ですから、我々のミッションとしてはメディアとか、そういうところに何とか取り上げてもらうように、色々働き掛けしています。そういうところで取り上げられると、結構引き合いも多いですので、PRをしています。こだわりで、これではなくてはいけないというのも確かにありますが、そこで終わらない、そこから技術革新しながらやっていこうという企業もいらっしやいます。ただ、茶道であるとか、それにお使いになるお道具とかいうのは、それでなくてはいけないとか、かたちはこうでなくてはいけないとか、そういう部分は確かにあります。でも、それ以外のところで、自由な発想で色々な

ものづくりをされているような、漆器をや焼き物をやっておられるところも当然あります。ですから、こだわりはあるかもしれませんが、今は少ないのかもしれないですね。

参加者 4 用途転換というところ。同じものをつくるのに、手仕事から機械にという、そこら辺は入っていきやすい感じはするんですが、用途をごろっと変えてしまうというところが、わりと意識的に難しかったのかなと思います。

安藤 そうですね。我々も何々というものがあって、元々これの用途、他にどういう用途に使えるかというところを考えながらしています。

ただ、弊所にはデザインチームがありますので、プロダクト全体で考えられるような土壌がありますので、結構多様な部分について提案でき、それを企業がいいなと思って開発、製品化に持っていったっていただくというのも出てきつつあります。

竹浪 デザインチームの方では企画の立案から行って、こんなものをやりませんかということを業界に投げ掛けることも結構ありまして、佐藤喜代松商店と一緒に仕事をしたのが、自動車用の工具に漆を塗ったらどうかとこちらから提案しました。京都機械工具、KTC というのが久御山にありますね。世界的な F 1 レースの工具にも使われています。そのラチェットレンチの一番最高級のものに、漆を塗って蒔絵を施して、鑑賞用の工具というのはどうだろうというのを KTC に直接行って、商品企画部の人にプレゼンしました。ついては京都の若い漆の人に塗らせてやってくれと言って。話したときは一笑に付されたんですけども、何だかんだあって、商品化しまして、今海外の富裕層の方に買っていていただいて、コンスタントに発注があるということです。

白井ベルといい、鑑賞用の工具といい、ちょっとへんてこなアイデアですけども、そういうのを面白がってくれる土壌は、安藤が申し上げたとおりのあるなという気はします。ただ、他産地の方が、例えば、有田焼だったら、有田の業界を挙げてどんと新商品を出したりする身軽さはあると思います。

安藤 そうですね。焼き物でも今のライフスタイルに合うようなかたちのものというのは、商品開発なさっているところがあります。産地を挙げてどん

というところの動きは、なかなか取りにくい地域は地域だと思います。ただ、そういう企業がないわけではないです。

司会 あれは陶葺（とうあん）さんですね。

安藤 そうです。

司会 ああいうのが何個かブレイクしていくと、どんどん動くんですけど、なかなか。だいたい基本は決まっていますね。西陣だったら、細尾さんところが紹介されるとか。だから、おそらくほかの業界の方も細尾さんは特別だということになるだろうし。幾つかブレイク例が色々な分野で出てくると、一気にがんと行きますからね。

安藤 西陣ではそうですね。その他色々やられているところもありますし。建材において展開というか、その中の素材として使ってもらえるようなところもあります。あと、染めの部分でよく最近メディアに露出されているところだったら、眼鏡拭きだとか、そういうようなところをやって若い人たちに仕事をつくりながら、なおかつ値段的にもそこそこのものでいうように、そういう展開をされているところもあります。やはり技術をやっている方もだんだん世代が若くなってきており、そういう意味からすると多様な製品は出つつありますね。それは間違いないと思います。

参加者5 よろしいですか。この間ちょっと産業大学の理事長さんのお話を聞く機会があって、そこで西陣織の勉強をされていたみたいで、話を聞きました。これから西陣織を展開していくのに、どうだと言ったら、細尾さんがやられたみたいに、生地幅の機械をつくらないといけないんだと。細尾さんのところは特許を押さえていると思うんだけど、そういう機械が一般的になってきたら、ほかの西陣の織り屋さんでも、そういう新しい研究が出てくると思うんですけども。こちらの方ではそういう機械の開発とかはやられていないんですか。

安藤 そういう機械と言うか、担当と言いますか、その辺の機械を分かっているものはあります。今はなかなかそこまでいけていないのが現状です。

参加者5 壁紙だったら、900ミリとか、1200とか、それぐらいになると思うんですけども。西陣の生地と言ったら300ぐらいのものなんですかね。

安藤 そうですね。だけど、当然広幅で織るような機械は西陣にもあります。

世の中にないということでもないんですね。やはり、設備投資のところをどうクリアしていくかが、結構大きな問題になっております。ポテンシャルが結構ある企業につきましては、今その施策としての補助金であるとかを利用して、設備の導入とかは比較的しやすいところがあるんですけども。もう少し時期はかかるのかなと思います。

参加者5 織り屋さんなんかはみんな小さいから、それだけ設備投資できないんでしょうね。

安藤 そうなんですね。そういうのはあります。ですから、ネクタイ地とかで、そのために大きなものを入れてやっていらっしゃる場所もありますし、この広幅ではなくて、普通の幅でそういうのを織っていらっしゃる場所もあります。

司会 だいぶ時間も来ましたので。よろしいでしょうか。

この後、懇親会もありますので、京都工芸サロンはいったんここで閉めることにして、引き続き、すぐ準備して交流会、懇親会をするように致します。

そうしましたら、安藤さん、お忙しいところ、今日はどうもありがとうございました。

(終了)